



昔から美術は好きだった。どちらかというと写生よりは手づくりや工作の類のほうが得意だったが、今もときどき美術展には足を運んでいる。絵でも景色でも、実物を自分の目で見ると、そのスケール感がわかるというのがいちばんの利点である。意外に小さい絵なんやあとか、美術教科書では小さく見えたのにこんなにデカイのねえ等。最近では、漢字ミュージアムにあった甲骨文字の小ささにびっくり。イメージ的には一文字が小指の爪の大きさくらいだと思っていたが、実物は米粒より小さい線刻の文字であった。

年賀状は小学4年のときのゴム版画から始まり、ガリ版、木版、プリントごっこ、シルクスクリーン、水墨画、スケッチ絵など、ありとあらゆるもので作ってきた。ここ5、6年は自分で描いたスケッチ淡彩画をパソコンで印刷したものが続いているが、なんかね、なかなか納得のいく絵が描けなくて、いつか、ちゃんと水彩画を習いたいと思っていた。ようやく念願かなって、昨年5月から水彩画を習い始め、ますます絵画に興味が出てきたところである。

しかし、好きだとはいっても、ふつうよりはちょっと上手に描けるかも…程度の趣味の域を出ず、美術や音楽などアート系の人は特別才能のある人、異人種のイメージである。私が通っていた女子大のすぐ近くに京都市美大があり、七条通りはいかにも地方出身真面目でちょっと野暮ったい女学生に混じって、ひとめで美大生とわかる派手・汚れファッションのヒッピーの人がまぎれていた。美大の学園祭には押しかけたものの、何がなんやらどこがよいのか、ようわからんもので埋め尽くされていたが、そこはやっぱり自分たちとは違う才能が溢れていたような気がする。

そんな人たちの学校の最高峰、国立東京藝術大学のルポ『最後の秘境東京藝大』は、予

想どおりに私ら庶民には理解しがたく、かなり変わった人が行く学校なのだ。現役の藝大生である著者の妻の案内のもと、藝大の中に深く分け入っていく。奥様の専攻は彫刻科で、家のベランダにはガラクタにしか見えない木材があふれ、食卓にはガスマスクのフィルターがさりげなく置いてある。藝大生協で販売しているガスマスクは、有機溶剤染料などで発生する有害物質防除のために必要な器具なんだそうで、校庭にはとてつもなく大きな石がいくつもごろんと転がっている。

藝大は音楽学部＝音校と美術学部＝美校に分かれている。単に頭が良く勉強ができるだけでは入れない。音校も美校も入学試験は実技試験重視である。藝大に入るには音楽専攻ならピアノ、ヴァイオリンは2、3歳から有名な先生に指導してもらい、美校なら予備校でひたすら実技の基礎レッスンを受けなければならない。実技重視とはいはいえ、音校の一次試験はたった5分間の演奏、美校は1日かけてデッサン6時間と、隔たりがある。基礎の演奏技術とデッサン力はできて当たり前なので、居並ぶ教授陣を前にして、それ以上のものを出さないと合格できない。音楽部に口笛で入った男子もいるそうだ。在学中に認知されて早くプロデビューをしたい音大生には浪人生が少なく、後からでも作品が評価される美大生は現役が2割、平均浪人年数は2.5年。絵画科の競争率はなんと17.9倍！藝大の平均競争率も7.5倍の狭き門である。

そして、在学生の格好や雰囲気も音校と美校では全く違っていて、音大生は在学中からコンサートや舞台に立つために身なりや服装は洗練、表情が明るいのに比べ、美大生は奇抜な格好や上下ジャージ姿、ボサボサ頭の気難しく暗い顔の学生も少なくない。絵を描けば汚れる、衣類に染料が飛べば落ちないしね。生の一発勝負の音楽演奏も、作品が後々まで残る制作も、どちらも体力仕事の肉体労働であるが、文化祭では互い応援や協力して藝大ならではのものを作り上げるのである。

『最後の秘境 東京藝大』二宮敦人 幻冬舎